

金の鯉

野村胡堂

—

江戸の大通だいつう、札差百九人衆の筆頭に据すえられる大町人、平右衛門町の伊勢屋新六が、本所たてかわすじ豎川筋の置材木の上から、百両もする金銀象嵌きんぎんぞうがんの鯛竿たなごさおを垂れていとところを、河童に引込まれて死んだという騒ぎです。

その噂を載のせて、ガラツ八の八五郎は疾風しつぷうの如く銭形平次のところへ飛込んできました。

「た、大変ッ」

「何だ、八。帯が半分解けているじゃないか、煙草入を何処へ振り落したんだ」
「それどころじゃねえ、親分。万両長者が土左衛門になったんだ——あ、水が

欲しい」

「瓶かめの中へ首でも突っ込んで、土左衛門になるほど呑むがいい。空からつ尻けつの土左衛門の方が話の種になるぜ」

平次は驚きもしません。ガラツ八め奴何を面喰って飛込んで来やがった——と言った顔です。

「死んだのは平右衛門町の伊勢屋新六ですぜ、親分」

「金持が土左衛門になったところで、十手捕縄を持出すには及ぶめえ」

「それが、豎川で釣つりをしているうちに、河童かっぱに引込まれたんで——」

「まさか、河童を縛れというわけじゃあるまいね。河童や狸の退治なら御用聞ごようもんを頼むより、武者修行か何かなにかに頼む方が筋になるぜ」

もう戌刻いっつにも近かったでしょう。平次は遅い晩飯を済して、良い月を眺めながら、ぼつぼつ寝支度に取りかかろうと言う時、あわて者のガラツ八に飛込ま

れて、御機嫌甚だ斜めです。

「懊しれったいね、親分」

「俺もじれったいよ。其処で首を振っていられちや、折角の良いお月様が拝めなくなる」

「それどころじゃねえ、——お月様は明日の晩も出るが、伊勢屋新六を突き殺した野郎は、明日になれば、涼しい顔をしてお月様か何か見えていますぜ」

「何？ 伊勢屋新六を突き殺した？ 河童かっぱがかい？」

「河童なら尻小玉しりこたまを抜くのが商法でしょう。突き殺すという術ては怪物えりものにはない筈はずじゃありませんか、ね親分」

「——商法は変な言い草だが、突き殺したのが本当なら、鬚まげを結ゆった河童だろう。そいつは何時のことだ」

銭形平次もようやくやく本気になります。

「酉刻（六時頃）ぎりぎり、金龍山の鐘が陰に籠つてポーンと鳴るのと、伊勢屋新六がドボンとやらかしたのと一緒だ」

「フ——ム」

「石原の兄^{あにき}哥（利助）のところで油を売っていると、豎川からその知らせだ。お品さんは家中の若い者を一人のこらず現場へ出して、そつとあつしに言うことには——これは容易ならぬことになるかも知れない。子分達だけでは心細いから、すぐ銭形の親分のところへ飛んで行って下さい。お願いをしても聞いて下さらなかつたら、首へ縄を付けても引張つて来ておくれ——と」

「お品さんが——首へ縄を付けて——とは言うまい」

「それは物の譬^{たとえ}で」

「つまらねえ作^{さく}なんか抜きにして——それっ切りか」

と平次。

「それっ切りだが、石原の利助兄哥は中気で、動きが取れねえ。お品さん一人で氣を揉もんでいるが、札差の伊勢屋新六が殺されたとあっちゃ、八丁堀の旦那衆も放はなつて置きなさるめえ。行いつてやつて下さいよ、親分」

ガラツ八の八五郎は、思おもいの外の親切者でした。利助の娘のお品が、女だてらに、親父の縄張りを守まもっている苦心を思うと、本当に平次の首根くびねっこへ、縄を付けても引張り出だしたい心持でしょう。

平次は黙もくつて考え込みました。ガラツ八に口説くどかれる迄もなく、お品を助けてやるに異論はありませんが、今から豎川たてかわの現場へ行いつたのでは、どんなに急いでも亥刻よつ（十時）近ちかくなるでしょう。その前に何かする事はないものか、そんな事を思い廻まわらしているのです。

「八」

「へエ——」

「手前、足は早いな」

「馬ほどじゃありませんが、人間並には駆けますよ」

「豎川の材木置場まで、四半刻（しはんとき）（三十分）では何うだ」

「四つん這いになって行くんですかい、親分」

「馬鹿なことを言やがれ」

「四半刻ありや、亀戸の天神様へ行つて有難いお札を頂いて帰つて来ますよ」

「それじゃ大急ぎで飛んで行つて、掛り合いの者を一人残らず集めて置いてくれ。何処かへ纏まとめて、一人も外へ出しちゃならねえ」

「そんな事ならわけアありません」

「待て待て、糸目いとめの切れた尻見たこたいな野郎だ」

「まだ話があるんで？」

「釣場つりばの材木に血が附いているなら、洗っちゃならねえ。血がなかつたら、――」

「斯うと、伊勢屋新六の供の者や近所にいた者の髪を見るがいい。男でも女でも構わねえ、鬚まげの中が湿しめっているか、元結もとゆいが濡れている者があつたら、その場で縛り上げるんだ、解つたか」

平次の命令は細々と行届こまじまきます。

「大解りだ、親分は？」

「後からそろりそろりと行く」

「それじゃ」

ガラツ八の八五郎は、飛びました。身上も軽く気も軽い男です。強健な三歳駒のように本所へ——。

その頃の釣の豪勢さは、物の本に僅かにおもかげを伝えて居ります。豎川筋の大名釣は、置材木の上に金欄の座蒲団を敷き、後ろに金屏風を立てめぐらし、金銀象嵌の置竿に、当時の名妓の生毛を釣糸とし、茶器の贅を尽し、酒食の豪華を競い、印籠から練餌を出して、盛装の腰元に付けさせ、二寸足らずの鱈や青鱈を釣って、悦に入つたというに至つては、有閑無為の人達の贅が馬鹿馬鹿しくも気の毒になります。

伊勢屋新六は江戸の札差でも町人に違いはなく、まさか、金屏風をめぐらし、椎茸鬚の腰元に餌をつけさせるような事はしません、番頭手代から、芸奴幫間を引つれ、白粉臭い生きた屏風に取巻かれて一本百両の竿に、高尾、小紫の生毛をつけ、豎川の——その頃はよく澄んでいた水に、ポンと鉤を投つて、金煙管を脂下りに啣えたことに何の変りもありません。

それが、薄暮の水の中に、河童と覚しき怪物に引込まれ、二の橋から迎えに

来た船頭文次の船に、漁師の伊太郎の手で引上げられたのは、ほんの煙草二三服の後でしたが、頸筋を深々と刺されて、もう虫の息になっていたと言うのです。

錢形の平次が豎川の材木置場に馳付けたのは、戌刻半（九時）そこそこ。思いの外の成績ですが、それでも、ガラツ八よりは四半刻近くも遅れました。

「親分、——掛り合いの人間を、庵寺あんでらの中へ——と纏まとめにして置きましたよ」
ガラツ八はそれを迎えて、獵犬のような鼻を蠢うごめかします。

「それは宜い塩梅あんばいだ——髪の毛は？」

「一人も濡れたのなんかありません」

「じゃ、やはり河童の仕業しわざかな」

「冗談で、——親分」

「まあ、いい、——気の毒だが、掛合いの人達に、因果いんがを含ふくめて、その庵寺から

出ないようにしてくれ。評判のよくねえ人間だが、伊勢屋新六が殺されちゃ、お上が放つちや置くまい。お奉行所から何とか仰しやる前に、下手人の目星だけは付けなきや——」

「今晚中にやる気ですかえ、親分」

「河童の元結や犢鼻褌ふんどしの乾かないうちに縛りたいところだ」

「へエ——」

平次はガラッ八に後を任せ、お品と利助の子分二三人を伴れて、現場の材木置場へ行きました。

良い月です。その上御用の提灯が二つ、平次の馴れた眼は、大抵のこを見逃しません。

「伊勢屋新六の増長は目に余りましたよ。町人の奢りおご僭上せんじょうは、いずれおとがめものですが、伊勢新は悪く俐口で、なかなか尻尾を出しません」

「フム」

利助の子分の若松というのが説明してくれるのを、材木置場に立って、平次は神妙に聞きました。

「一頃は恐ろしい女道楽で、吉原から四宿、岡場所まで、掃いて廻り、何十人、何百人の若い妓を泣かせたか解りません。金があるに任せて大通気取りで荒し廻るのですから、内証の人氣は大したもので、妓共からはこの上もない嫌われ者で、中には捨てられて入水した者、氣の違ったもの、行方不知になったものもあるということです。三十七の男盛りで、何の因果か、伊勢新は全く好い男振りでしたよ」

「――」

「故郷の伊勢へ帰った時は、鳥羽へ遊びに行つて、松風村雨氣取りの海女姉妹を手に入れ、さんざん弄んだ拳句、江戸まで跟いて来られ、一と騒ぎやったと

か、——箱根の湯女ゆなに追っかけられて、命からがら江戸へ逃げ帰ったとか、独り者の気楽さも手伝って、底も果てもない放埒はなでした」

「それが、厄介なことに楊弓ようきゆう、賭け碁かご、釣と、女道楽の片手間にやります。——

——今日なども現に、同じ札差の道楽仲間、お蔵前の板倉屋忠兵衛に冷かされたのが基もとで、午刻ひる過ぎから暮六つまでに、十匹釣ったら板倉屋が百両で買ってやる、十匹が一匹欠けても、伊勢屋が百両出すという約束で、六つの鐘が鳴るまで、——四方あたりはもうすっかり暗くなったのも構わずに、血眼になって釣って居たのだそうです」

「十匹釣れたのか」

と平次。

「九匹まで釣ったそうですよ、——あと一匹という時、暗くなりかけた水の中に、何か光る物があつたんだそうです。伊勢新が乗出して覗いたところを、水

の中から、毛むくじやらかな手が出て引込んだと言うんです」

若松は平次の立っているあたりを指しました。紬つむぎの座蒲団は少し斜ななめになって、その下に敷いた莫蔭ごいんは、水へ二三寸落ちかけて居りますが、皎々こうこうと照らされた材木の上にも、敷物にも血の痕などは一つもありません。

豎川の水は、斜に上った月の光を受けて、ギラギラと光るだけ。底などは見える筈もなく、此処から平次も、何の手掛りを得られそうもなかったのです。

三

供の者は、番頭の平七と、漁師りょうしの伊太郎と、芸妓が三人、年増のおさの、少し若いお国、一番若いお舟、いずれも仲町の良い顔、それに幫間たいこもちの理八、これが全部です。

それだけを、材木置場のすぐ裏の庵寺あんでらに入れて、ガラッ八と利助の子分が、番犬のように頑張っているのですが、平次はそれらの人達に逢う前に、まだ舟の中においたまま、検屍けんしを待っている、伊勢屋新六の死体を見ることにしました。

舟はそこからほんの十間ばかり、二つ目寄りに繋つないで、船頭の文次が、町役人といっしょに番をしております。

「あ、銭形の親分さん、御苦労様で——」

文次が驚いて挨拶するのへ、軽えしやくく会釈を返して、平次の手は舟の中の菰こもを剥ぎました。

「ウーム」

万両分限ぶげんも、こうなつては見る影もありません。何も彼もまだベツトリ濡れて、出血のために青く引締った顔は、月の光の下に、不気味なほど人間離れが

して見えます。右頸筋みぎくびすじに、下から突き上げた傷は、ささくれた肉を盛り上げて、ほとんど長方形に見えるのは恐ろしいうちにも玄人くろうとの眼をひきます。

「親分、これは何で突いたのでしょう」

若松はその傷を指しました。

「あいくちヒ首や刀ではないな」

「不思議ですね」

「河童の牙きばが鑿のみのようになって居るとは聞かなかつたよ——下から突き上げたようだが」

平次の顔は、少しも冗談を言っている様子はありません。

平次とお品と子分等は、庵寺あんでらへ引返しました。この上は男三人と女三人を、片っ端から調べるより外に方法はなかつたのです。

最初に庵寺から引出して、月下の材木置場へ伴れて来られたのは、漁師の伊

太郎でした。佃つくだの者で四十男。伊勢新の釣つに網のお供をさせられますが、金にはなつても、人も無な気げな豪勢振りが、少し小癩こしやくに障さつて居ゐるらしい口吻くぶんです。

「あんまり奢おごりがひどいから、こんな事にならなきや宜よろいがと心配して居ゐましたよ。あゝゝゝつしは稼かぎ業ぎょうだから来いと言いわれれば、何処どこへでもお供をしましたが、お手当祝儀を世間並の倍貰もらつても、百両の釣竿つりざなで鮒ふなや鱧たなごを釣つるのを見みちや良い心持はしません。第一女郎の髪かみの毛けで釣つられちや、魚いしだつて浮うばれるわけはねえじゃありませんか」

「すると、お前は、伊勢新が殺ころされてくれれば宜よろいと思おもつたのかいと平次。

「飛とんでもない、——私の大事だいじなお華客きやく様さまだ。百までも生きて貰もらいたいと思おもいましたよ」

伊太郎はあわてて自分に振りかかりそんな疑うたがいを払はらいのけました。

「伊勢新が水へ落ちた時お前はどこに居たんだ」

「釣の邪魔になるからと言って、二つ目に置いた舟の迎えに行つて、船頭の文次と二人で漕いで材木置場の方へ来ていましたよ。すると、二三十間先の材木置場で、女の声がして」

「待つてくれ——女の声を聞いたのは、その時が始めてか」

「へエ、——暗くなりかけて、よくは解りませんでした、材木置場には女が二人、何か大騒ぎをしている様子でした」

「それから」

「びっくりして漕いで行くと、——旦那が——旦那が——と川を指して居るから、大急ぎで五六間のところへ行くと、人間が一人プカプカ浮いたり沈んだりして居るじゃありませんか」

「——」

「二人がかりで引揚げて見ると、それが伊勢屋の旦那で——水に落ちただけなら、伊勢生れの旦那は泳およげる筈ですが、あんなに喉のどを突かれちゃ助かりっこはありません」

「それでも何か言ったか」

「介抱すると、たった一と言、——金きんの鯉こい——と言ったようですが」

「金の鯉？」

平次はくり返しました。

「それっ切り息を引取って、誰が殺したか少しも解りません」

さすがに漁師の伊太郎は、河童説を信じてはいない様子です。

次に呼出されたのは幫間たいこもちの理八、五十がらみのよく肥った男で、小唄こうたを上手に歌うのと、軽口がうまいので人気のある男芸者です。

「これは銭形の親分さん」

ヒヨイと下げた頭、あんまりよく禿はげて居るので、前からでは鬚まげも見えませんが、後ろには若干いくばくの毛があり、真新しい元結が、よく油で塗り堅めた小指ほどの鬚しか節を確と締めて居ります。

「師匠は何処に居たんだ」
と平次。

「どうした事か、一刻ばかり前からひどく腹が痛くなって、我慢にも、外の風あんでらに吹かれちゃ居られません。仕方がないから、おさの姐さんと一緒に、庵寺あんでらの隣りの茶店の離れを借りて、休んでおりましたよ」

理八は額をツルリと撫で上げました。

「おさのも腹が痛かったのか」

「へエ——お店から持って来た、安倍川餅あべかわもちを二つ三つやると、半刻ばかり経つて急に腹が痛み出しました。他の方は酒がいけるので、安倍川なんかには手は出

しません。甘いのがいけるのは、私とおさの姐さんだけで」

「その安倍川餅の残りは何うした」

「竹の皮ごと川へ捨ててしまいましたよ」

「――」

平次は舌打をしたいい心持でした。安倍川がなくては調べようがありません。

「でも、妙にほろ苦い安倍川でございましたよ。あんまり沢山食わなかつたので、命拾いをしたのでしよう、へエ」

「それにしては達者じゃないか、毒などを食わされた人間のようにじゃないが――」

「二度ばかり通じが付くと、ケロリと直ってしまいました。おさの姐さんも同じことだそうで」

「だいおう大黃かな？」

平次は首を捻ひねりました。曲者は酒を呑まない二人を遠ざけるために、安倍川へ大黄を混入して、下痢げりを催もよおさしたと考えられないこともありませぬ。砂糖を入れた大黄を、黄粉きなこのつもりでしたたかに呑んだだけなら、二三度通じが付いて、あとはケロリとして居るのもありそうなことです。

「——でしようかな、親分さん」

理八はまだ俯ふに落ちない顔をします。

「ところで、伊勢屋新六を怨うらんでいる女は誰だろう？」

「江戸中の女の百人に一人位は怨うらんでいますよ、——何しろ金があつて薄情で、男がよくて、口前がうまくて、浮気ほろつきで、箒ほうきで、ケチと来て居るんで」

「——」

あまりの痛罵つうばに平次は呆気あっけに取られました。ツイ先刻までは、伊勢新の腰へダニのように喰い付いて居た男です。死んで、もう一文にもならないと見ると、

この男の毒舌には全く遠慮がありません。

「死んだ人を悪く言うようですが、嘘だと思ったら、おさのに聞いて下さい」

「そのおさのの事で、師匠は伊勢新を怨んでいるのだろう」

平次はズバリと言つてのけました。理八のいけ酒蛙しやあしやあとしたのが面憎かつたのでしよう。

「と、飛んでもない、親分さん。怨んでるのは、お国姐さんとお舟姐さんで、あの二人は若くて綺麗だから、伊勢屋の旦那の人身御供ごくうに上がった方で」

「あの茶店の離屋から材木置場へは、人目に触れないように来る道がある筈だ。

二人で組んでやると、水へ入つて来て、髪を結い直して、済すましていてもちよつと解わかるまいな」

「と、飛んでもない親分、この庵寺の尼さんじゃあるまいし、私は禿はげててもこの通り毛がありますよ。濡れた毛か濡れない毛か、よく見て下さい」

理八は泣き出しそうでした。自分の小さい鬚まげを摘つまんで、平次の前へ執拗しつこく持つて来るのです。

「おさのは幾つだ」

「もう三十八で、へエ、伊勢屋の旦那より一つ年上ですよ。来年は私と世帯を持つ約束で、こんな事で人殺しの疑いなんか受けちゃ間尺に合いません」

理八はとうとう泣き出してしまいました。

四

続いて芸妓が三人、おさのの言うのは、理八と全く同じことで、何の変哲へんてつもありません。厳しい腹痛と離屋はなれと、それから下痢げり、と相談した以上に、細かいところまで口が合います。

次に呼出されたお国は、せいぜい二十一二、芸妓にしては年増ですが、仲町なかの芸妓らしく素顔に近い薄化粧で、少し青い顔も、唇のわななきも、抜群の美しさを隠しようはありません。

「何だって、伊勢屋を川へ突き落した」

「――」

平次の言葉の峻烈しゅんれつさに、お国はハッと息を吞みました。美しい顔が真つ蒼になつて、額口から、冷たい汗がにじみます。

「河童かっぱのせいなどにしやがつて、飛んでもねえ女あまだ。お上にも御慈悲がある、伊勢屋の悪いこともことごとく承知だ。残らず言つてしまえッ」

「申します、親分さん」

お国はヘタヘタと材木の上に崩折くずおれてしまったのです。月の光に濡ぬれたような袷あじ、白い襟からに後れ毛からが絡からんで、――辛からくもあげた顔には悲しみと絶望の色が

「パイでした。」

「お舟と二人で突き飛ばしたことは解っている。が、どんな怨みがあった」
平次は日頃の平次になく峻烈です。

「妹は何にも知りません、——今晚帰ると、自分が人身御供に上げられること
さえ知らずに居る妹ですもの」

「水の中に何か光る物があつたのも、本当です。夕陽の具合で、いつも見えな
いものが材木置場から見えたのでしよう。それを私が教えると、伊勢屋の旦那
は釣竿つりざおを片手に、材木の端っこまで乗出して水の中を眺めました」

「泳およぎの自慢な旦那でした。伊勢とかで育つたそうで、——こんな川へ落した
ところで、まさか死ぬような事もあるまい、私も四五年前、あの人にはひどい

目に逢いました。この上妹まで、けだもの えじき獣の餌食にしたくないばかり、——今晚が過ぎたら、何とかなるだろうと思うあさはか浅墓な考えから、突くともなしに、後ろから突いてしまいました」

「旦那が水に落ちると、何にも知らぬ妹は大きな声を出しました。私も思わず助けを呼ぶと、一度水に沈んだ旦那は、浮び上がって来てこわ怖い顔で私達を睨みましたが、水の中の光る者をさが捜すつもりか、また底へもぐりました。——私と妹はもう怖くてそれを見ては居られません。思わず向うから来た舟を呼ぶと、旦那はもういちど水の上へ浮び上がって来ました。が、その時はもうけが怪我でもした様子で、滅茶滅茶に苦しんで、下へ下へと流れて行きました、——水は真つ赤になったようでした」

お国は言いわいたってガツクリ首を垂たれました。

「それっ切りか」

「それっ切りでございます。錢形の親分さん、妹を助けてやって下さい。あの子は、何にも知りません」

「お前の言うのが本当なら助けてやる」

「お願い」

お国は手を合せます。

「が、伊勢屋の首を突いたのは、誰だ？」

「存じません」

「水へ突き落す時、後ろからやったのじゃあるまいな」

「そんな事が、親分さん」

その不合理さは平次自身にもよく解ります。が、人間が水の中で突かれると
いうことも一寸想像の出来ないことでした。

いずれにしても怪しいのは水の中にあつたという金色の一物です。夜の作業の無理を承知の上で、平次は船頭の文次と漁師の伊太郎を水に潜くぐらせることにしました。篝かがりを焚たき、松明たいまつを造り、青砥藤綱あおとふじつなほどの騒さわぎをするのを、平次は宜い加減に眺めて、庵寺あんでらへ引返します。

外見は間違いもなく寺院風ですが、荒れに荒れて、戸も壁もあると言うは名ばかり。中は仏間と居間と台所だけの簡素かんそな造りで、そこに大きな疑惧ぎぐを背負しよわされて、閉じ込められた六人の男女は、更くる夜とともに不安を募らせるばかりです。

庵主は三十前後の若い尼で、良海りようかいと名乗りますが、色の浅黒い、確しっかりした恰幅と、旅から旅を經めぐつたらしい、風雨の洗礼が、何となく人柄そやを粗野に見せます。

青々とした剃そり立ての頭、目鼻立みにくも醜みにくくはなく、念珠つまぐを爪つま繰ぐって仏の御名を

口から絶やさないと、豎川べりを通る時は、贅沢な素人釣の後ろに立って、
一くさりの経文きょうもんを手向たむける癖があるので、釣好きの仲間からは、相当に煙たが
られて居ります。

平次はこの尼に逢って、いろいろ訊ねましたが、半分は念仏とを称とえているの
で、一向話が進みません。ただ、尼は関西の生れで、五年前に旅に出たこと、
この豎川に住み付いて一年、町の人に請こわれるまま、無住の庵室に住んで、朝
夕仏に仕える外に仕事のない、行い澄ました日常が判っただけです。

それから、お国の妹というお舟にも逢って見ました。これは十六の小娘で、
お国とは本当の姉妹、顔も美しさもよく似て居りますが、お国はこの稼業かぎようの女
らしく、不摂生ふせつせいと心配で早老が目立って居るのに比くらべて、お舟はまだ、木から
取り立ての果物のように新鮮さが匂って居りました。野獣のような伊勢屋新六
が、白羽の矢を立てたのも無理はありません。

平次の間とに対して、思いの外ハキハキと応えてくれますが、結局はお国の言つた通り、何にも知らないことが判つただけです。

五

もう一人、庵寺に、囚とらわれた中に、番頭の平七が居りました。これは分別臭い四十男で、主人新六の遊び友達には少し固過ぎますが、何となく伶俐りこうそうな男で、平次も一応は疑つて見ましたが、間もなく、事件のあつた四半刻前、平右衛門町の自宅へ主人の帰宅さきふれの先触さきふれに帰り、騒ぎを聞いて、酉刻半頃むつはんまた豎川へ駆け付けたのだと判つて、これは疑いの外に置かれました。

その番頭の平七が、そつと平次に耳打をしたのです。

「旦那のを突いたのは鑿のみじゃございませんか」

「それは判つて居る、——多分川の底から出て来るだろう」

「でも、庵寺の隣と——材木置場との間に、大工道具の置場がありますが——」
「何？」

平次は提灯を持たせてすぐ飛出しました。なるほど、材木置場に通う職人達の便宜のために建てたのでしよう。ほんの二た坪ばかりの物置があつて、道具棚の下には、番人が寝泊りの出来るようになっていたのです。

開けて見ると、中は空からっぽ。

棚の上の道具箱をのぞくと、いちばん上に置いた鑿のみが一挺、半ば乾きながらも、下になった半分は、したたかに濡れて居るのが見付かったのです。

「これだ」

取上げて見ると、刃はが脂あぶらに曇つて、血あとの痕こそありませんが、人を突いた証拠が立派に揃つております。

鑿の持主はすぐ捜し出されました。駒吉と言う若い男、まだ半人前ですが、人間が甘いのを可愛がられて、町内では知らない者もない人気者です。騒ぎの面白さに、自分の巢へも入らず、あっちこちと弥次馬について歩いて居るのを、これはガラッ八に首根っこを掴まれました。

「俺は何にも知らねえ、鑿は俺の物に違いないが、人なんか突いた覚えはねえ」
平次が静かに訊いても、すっかり逆上して、知らぬ存ぜぬの一点張です。

「それじゃ、小屋へ入って、道具を持出した人間を知らないか」
「知らねえ、知らねえと言ったら、何にも知らねえ」

これでは手の付けようがありません。

試みに小屋へ行つて見ると、壁と言ってもほんの筵を吊っただけ、道具箱の在りか所さえ知って居れば、外から手を入れて鑿を取出し、人間一人水中で突いた上、元の場所へ返して置けないことはなかつたのです。

「この辺の様子を知って居る者だろう」

平次もそう見当を付けるのに精一杯です。第一、駒吉の頭は水気どころか、ろくに油気もない始末で、火を附けたら、火口のように燃出しそうに見えるのです。

最後の一人、伊勢屋新六と百両の賭かけをした、坂倉屋忠兵衛も登場しなければなりません。平次は気が付くとすぐ、お品に頼んで、利助の子分を二人走らせました。

お蔵前まで往復一刻足らず、何も彼も解ったところは、平次を落胆らくたんさせるばかりでした。坂倉屋の言い分は、『百両の賭かけはたしかにした。が、そんな事はありがちの事で、百両ばかりの金を取られるのが惜おしかったら、月に一人ずつ人殺しをしなければなるまい。——それはまア宜いとしても、今日は碁ごの師匠が来て、昼頃から打ち始め、十番碁の今は七番目だから、夜中前には外へ出られ

る筈はない』という挨拶です。

金持の増長した言い草ですが、それが本当なら、どうすることも出来ません。そのうちに川の方から、多勢の声高に話すのが聞えて来ます。

「親分、川の中から大変なものがあがりましたぜ」

ガラッ八が飛んで来ました。

「何だ、大変な物てえのは？」

「金の鯉」

「えッ」

平次も新しい糸口いとぐちを掴んだような気がして、飛んで行きました。

伊勢屋新六が、むき出しの頸筋くびすじへあれ程の傷を受けて、材木置場に血の斑点はんでん

もこぼさないのは、やはり水の中で突かれた筈で、水の中に謎なぞが潜ひそむとすれば、

伊勢屋が断末魔に言った『金の鯉』という言葉が意味深長になります。

「親分さん、これが水の中にありました」

水から這い上がったばかりの、船頭文次の手の上には、金鱗燦きんりんさんとした一尺ばかりの鑄物の鯉いものが載っているのです。

「――」
平次は黙って受取りました。音や貫々や、作の具合を見ると、銅きんめつきに金鍍金をしたものらしく、安置物によくある品ですが、水に入っただのは昨今の様子で、大した変色もせず、錆上さびあがつても居ません。

作は拙劣せつれつで、まず田舎の床の間でなければ通用しないものでしょう。引くり返して裏を見ると、それでも、勢州住人治郎兵衛作と銘めいが入って居ります。

「――」
平次は次第に物事が判って来るような気がしますか、謎の性質が深いせいか、まだ核心かくしんには触れそうもありません。

「何刻なんときだろうな、八」

いきなり妙な事を聞く平次です。

「子刻このつでしょうよ」

「泊めたら心配するだろう。みんな帰してくれ」

「へエ——」

「庵寺に止め置いた六人と、船頭を入れて七人、みんな帰してくれ。女どもは道が淋しかろう、乗物の世話をしてやるがいい」

「そんな事をして構いませんか、親分」

「下手人げしゅにんはやはり河童かっぱだよ」

「へエ——？」

ガラッ八は何が何やら解らずに、庵室あんしつへ引返しました。が、しばらくして又戻って来ました。

「みんな帰りませんよ、——河童が下手人だというわけを聞かなきゃ、安心して帰って寝られないと言うんで」

「成程な、——好ましい事じゃないが、それでは河童の正体を教えてやろう。みんな庵寺へ集めて置くがいい」

「へエ——」

ガラツ八は有頂天の様子で戻ります。

六

「まず、第一に」

平次は四方あたりを見廻しました。狭い庵室の二た間を打っこ抜いて、十三四人は入ったでしょう。疑われたのも、疑われないのも、好奇心にすっかり夢中です

が、たった一人、庵主あんしゅの若い良海尼だけは仏壇の前に端坐して、何やら口の中で誦ずしつづけて居ります。

「第一に、伊勢屋新六を良く思っている人間は、この中に一人もいないのが不思議だ」

そう言えば、船頭も漁師も、幫間たいこもちも番頭も、腹の中では新六を怨むかさげすむか、とにかく良くは思っていない様子です。

「それから、疑って見ると、不思議なことに潔白けつぱくな人間は一人もない——」
平次は皆んなのけげんな顔を見ながら続けました。

「理八とおさのは、腹が痛くて茶店の離室はなれへ行ったと言うがあれは大嘘だ」
「親分さん」

理八は乗出しましたが、平次はそれに構わず続けました。

「いくら大黃だいおうだって、そんなに急に腹が痛くなるわけはないし、怪しい安倍川

を川へ捨てたというのもテニヲハの合わない話だ、——これはやはり二人で逢あ引びするための拵しほえ事だろう。腹が痛いと言うことにして、離室で来年の春の事でも話していたに違いない、——尤も二人共謀ぐになって、水の中の働きさえ出来れば、離室から抜出して楽に伊勢屋を殺せた筈だ」

「親分さん、私は徳利でございますよ」

理八はまた口を出します。

「文次と伊太郎も、二人共謀ぐになれば、伊勢屋を殺せる筈だ。二人共水に達者だから、一人が二三十間潜って、伊勢屋を刺さして来さえすればいい」

「飛んでもない親分——」

漁師の伊太郎はムキになりました。

「お国とお舟が二人力を協あせてやれば、これも伊勢屋を殺せる。いちど突き落のして、材木へ泳ぎ付いて、這い上がるうとするとところを、上から鑿ので頸筋を突

けば——」

「鑿のみの傷は下から突き上げておりますよ、親分」

今度はガラッ八が横槍を入れます。

「手前は黙って居ろ」

「——」

「番頭さんも途中から小戻りするという手があるし、駒吉も怨うらみがあれば材木の蔭に隠れて、這い上がろうとするのを突けないことはない」

平次の論告は、とにもかくにも本当らしく聞えます。あまりの不気味さに、十三四人、黙りこくって顔を見合せました。

七

「ところで庵主さん」

平次は庵主の良海尼りようかいにに声をかけました。

「ハイ」

看経かんきんを止めて、静かにふり向いた庵主の顔は、何と言う邪念じゃねんのない平静さでしよう。

「この鯉の置物をどうして、川の中へ沈めて置きました」

平次の問いは予想外です。

「あ、その事ですか、——あの人達が、あまり無益な殺生をするから、戒めいましのために釣場の下へ沈めて置きましたよ。そのせいで一匹でも魚が助かれば、何かの供養くようになろうと思ひましたな」

「成程、——ところで、庵主さんは、鳥羽の海で働いて居られたのでしょいな」

「海女あまが鮑あわびを取る時は、水の中に潜くぐって、鑿のみを使うと聞きました。水に潜くぐってあれだけ鑿のみを使えるのは、武芸の達人にも出来ませんよ」

「それから海女あまは水の中へ商売道具のの鑿のみを捨てて来る筈はない。これが外の者なら、泳にぎ悪いのを我慢して、血ち脂あぶらのついた鑿のみを持って来て、濡ぬれたまま元の場所ばしょにおくのが反かえって不思議だ」

「恐おそろしい静寂しじやくです。一座の人の顔は驚愕かぜきに化石かせきしますが、良海尼だけは反かえって女めらしい柔やわらかさと落着おちきを取戻として、何の恐おそるる色もなく静しずかに平次を見上みあげるのでした。」

「伊勢屋を突いたのは、水中の働はたらきに違ちがいないが、この人数の中で頭の毛けの濡ぬれた人間は一人もない、——とところが——」

皆んなの眼は良海尼のよく剃^そり丸めた、
碧空^{あおぞら}のような頭に膠着^{こうちやく}しました。



「もう一つ、これは黙って居るつもりでしたが、裏口の盥たらいの中に、濡れた腰衣こしころもと、白無垢しろむくと、襦袢じゅばんとがありましたよ」

「隠す気もなく隠したのでしよう、——私はまだ悟り切れぬ——でも、何方どなたか罪に落ちそうになれば、名乗って出るつもりでした」

良海尼は静かに言うのです。

「庵主さんは、松風ですか、村雨ですか」

と平次。

「妹は、恋こい焦これ、怨うらみ疲つかれて死にましたよ。五年前の、——九月、ちょうど今日」

「で、あと一つだけ、聞きたいことは、あの鯉のことですが——」

平次は何となく、この尼だけは下手人扱いにする気がなかった様子です。

「悪性男は、——江戸一番の分限ぶげんと言いふらして、金無垢きんむくの鯉で私の父親をた

ぶらかしました。あれがその時の金無垢の鯉ですよ、——銅に薄く金を着せたとは田舎者の眼が届きません」

「妹が死ぬと、父親も怨み死しじに死にました。銅の鯉を餌えさに娘二人まで捨ててしまったのですもの——、その間に、私ばかりは永らえて、はるばる江戸へ来たのは、あの悪性男に思い知らせるため、——そのうち師の御坊の教えで、しだいに昔の怨うらみも薄れ、心は一日ごとに澄み行きましたが、——」

「——」
良海尼は始めて涙を呑みました。

「この庵寺に住んでいるうち、ツイ眼の前の材木置場を釣場にして、三日に一度、五日に一度、豪勢な行列せつしょうで殺生せつしょうに来るあの男を見ると、私の心には、昔の怨うらみみが蘇よみがえ生がえりました」

「金の鯉を釣場の下に投込んで思い知らせ、せめて真人間の心に返させるつもりでしたが、そのお国さんとやらが、悪性男を水の中に突落したのを見ると、あの男の重ねた罪業ざいごうが目に見えるような気になり、この世の女人にょにんのために、——多勢の親と夫のために、——私は思わず、見覚えの小屋の道具箱から、手馴れた鑿のみを取り、着物のままで、水の中に飛込んでしまいました」

「降魔利生こうまりしようの鑿は岩あわびから鮑はがを剥すよりも楽に、悪性男をあの世へ引渡してしまいました。これは、良いこととは少しも思いません。御仏に仕える身で、まア、私としたことが、何と言う大罪を犯してしまったことでしょう。南無——」

尼は仏壇の方に向直って、ヒタと掌たなごころを合せました。滂沱ぼうたと頬に流るるは声のない涙、——それに合せて、何処からともなくすすり泣く声起ります。

一番先に畳にひれ伏したのは、お国、お舟の二人の姉妹でした。

「これで、何も彼も済んだ。皆んなの衆、遅くなつたが引取つて貰いたい。乗物も用意してある筈——」

平次は顔を起しました。

もう丑刻やつ近いでしょう。傾かたむく月が、障子のない窓を漏れて寒々と尼うなじの項を照します。

翌る日の朝、八丁堀から笹野新三郎出役。とにもかくにも形式通り大町人の変死を取調べました、河童に引込まれたとも、豎川の主の金の鯉たたりの祟であつたとも言ひ、人の噂も平次の調べも一向要領を得ません。

やがて平次が蒟蒻こんじやく問答のような事を言つと、与力笹野新三郎はそれが解つたのか解らないのか、心得顔に引揚げてしまいました。

庵室は空っぽ、良海尼は前夜のうちに消えてなくなつて、それっ切り歸つて

来なかつたのです。

「驚いたね、親分、——どうしてあの尼さんと解つたんで？」

ガラツ八は執拗しつように根掘り葉掘り訊ねます。

「頭の濡れないのは尼さんばかりだからさ。それに、松風村雨の話聴いていたから、あの尼さんの伊勢訛いせなまりで、フト気が付いたんだ」

「成程ね、まるで判じ物見たいだ」

「手前もその判じ物を当てるコツを早く覚えるがいい。物事を理詰に考えて、当てはまる絵解きが一つしかなくなるまで行くんだ。それが判じ物を解くコツさ」

平次はそう言ってカラカラと笑いました。如何にも快い心持そうです。

(編注)

作品中には、身体の障害や人権にかかわる、差別的な語句や表現が見られますが、本書が成立した当時の時代背景等が現代とは異なる古典的な文学作品でもあり、著者が故人でもありますので、底本のままとしました。ご理解、ご諒承のほどをお願い申し上げます。

挿絵―萩 柚月

初出―「オール讀物」昭和十二年十一月号 文藝春秋社

底本―「錢形平次捕物全集」第四卷 河出書房 昭和三十一年六月三十日初版

編集・発行
銭形倶楽部

金の鯉



錢形俱樂部

<http://www.zenigata.club/>